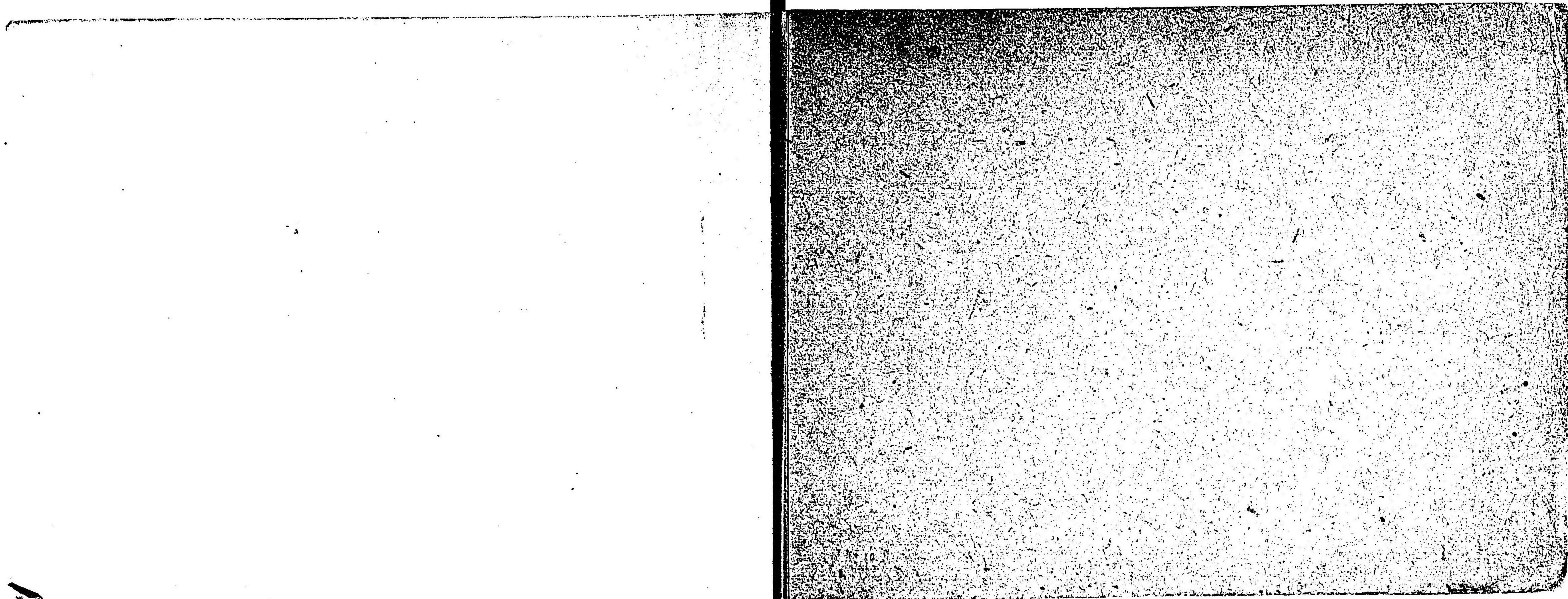


惠追此惠

韻 齋

259
700



生れて十八初めて戀を知りそが美し
き戀人と戀の美酒に酔ひて吾れ等が
世は永久に春よと歌ひしが!!おどま
しやサマンの毒矢に胸射ぬかれてお
はそれよ月なく星なく藻草香る池の
はどり「變らじ
と相抱きて泣きつ別れしが
熱つき血潮の燃へに燃ゆる狂ひに狂ひ
てさても淋しや草庵の「戀の追想」
「彼れは今如何に昔も現^{いま}在も變らじ
か」噫!!又して綴るすさし戀執る筆
あのみき目はうるひけれど「戀の追
想」よ

露
韻

明治
26
四月

浮舟生

あゝ君よ破れし戀故大なる

天地捨つる淋しからずや。

もろかりし戀なりしとぞ泣く君の

其の嘆かひに我をとらめや。

殊更に惜しく悲しく我泣きぬ

望みは多き君なりしもの。

眼閉つれば今日も見るなり草庵の

俯淋びし君が姿を。

露韻君へ

(落花の下の誓ひ)

(1) 葉末の露は重くして

桐の葉に散りかゝる

白萩なびく秋の風

草間にすたく蟲の聲

いと哀れなる秋の夕

君どの愛情は裂かれたり。

(2) 思へば果敢なき吾が戀や

思ひを出づる過ぎし日の

春は彌生の花も散る

王籠百花を積みこみて

霞の帳幕裂き給ひ

(3) 女神逝さます暮春の時。

彩樹碎けて鶴去りて

まだうら若き詩人が

詩筆なげうち腸をたつ

杜鵑血に鳴く青葉くれ

名残惜しくも逝く春を

静かに送る夕なりき。

(4)

嗚呼逝く春のいたましく
せめて一と夜を落花の下
逝春の詩を誦さばやと
憧れ出でぬ欄干ゆ
我れより先に人わりて
静かに立ちし御姿よ。

(5)

嗚呼そは人かはれ女神か
花の顔月の眉
清楚の姿いみじくて
愛に輝くその瞳み
智慧の湧さくるそのみ唇
我れは人とは知らざりき。

(6)

これやまことの春の神
今宵落花の おん舟に
桿さしまして天つ國
聖の宮居に歸ります
その御姿と想ひしが
まこと人にぞありにけり。

(7)

嗚呼その姿その姿
汚れある世にかく迄も
清よく美しくおん人の
住みておはすと知らざりき
清よく崇高きその姿
我を忘れて吾見けり。

(8)

暫時が程は恍惚と
憧れ見とれ居たりしが
かくてならじと近かつきて
聲もおのゝく我が想
君は何處の何人ぞ
知らせて給へ我が爲に。

(9)

僅かに問へば彼の君は
は、笑みながら近よりて
妾は石川露子とて
春の名残の惜しければ
暫時はこゝにぞむと
優しき聲にのたまふ。

(10)

君も逝春をば惜しまれて
憧れ出でし御心か
我れも名残の惜しければ
憧れ出でし詩心
一樹の蔭も縁なれ
暫時が程は語らはん

(11)

一樹の蔭に立ち寄りて
一河の流れくむるへも
宿世の縁と聞きにけり
一夜憧る花の下
君と言葉のかはしては
胸の血汐の狂うかな。

(12)

嗚呼世は更けぬいざさらば
惜しき名残を跡にして
さはれ想ひの何となく
別るゝことの惜しまれぬ
君も斯くとは思はるか
さらば後の日又逢はん

(二)
(樂のしき磯邊)

(1)

塵の巷をのがれ出で
君と樂のしき小半日
此處西の宮磯の路
並木の蔭に立ち寄りて
眺むや波のゆく末を
水涯の音も静かなり。

(2)

おぼろに霞む淡路島
白帆行きこころ波の上
袖吹きかへす撫風に
底の玉藻のかくはしく
波の洗ひし砂の上に
踏めば聲あり貝の殻

(3)

塩やく海土にあらねども
戀ひに身をやく君と吾
嬉れしからずや松青く
磯の真砂のいと白し
まこと今日こそ幸の海
希望の波の充ち充てり。

(4) 思へば過ぎし一夜さの
君と相見し其の日より
怪しううごく若き血の
君戀しさに吾れ活けり
斯くて情のみ言葉を
給ひし時の嬉れしさよ。

(5) 例へば海のわけばのに
磯邊の岸に新潮の
ひたひた寄する波の如
胸の血潮のたぎりては
前途輝く希望の光明
仰ぐ我身に似たるかな。

(6) 愛の御神に許されて
心に夫妻とよひかはす
君こそまこと我妻よ
世は永久の樂園に
諸手をとりて彷徨はん
君よ想ひは如何ならん。

(7) 君はかく迄妾をば
愛して給ふおん人か
嗚呼情あるおん人よ
妾は正しく君が妻
君は妾の夫にて
永久に變らぬ夫婦なれ。

(8) よしや浮世の風つよく
寄邊なき浪の襲ふども
君を力と頼む身の
なごかはおそれ恐るべき
二世も三世も永しへに
幸多かれと祈るなれ。

(9) おゝ美しき我妻よ
おゝ情ある妾夫よ
永久に變らじ永しへに
樂しき世をば渡らんと
双手を執りて一甲
嬉れし涙の溢れたり。

(10)

折しも聞ゆ暮れの鐘
夕日落ちぬと告げ渡り
波にたゞよふ祭の雲
七彩色のあせ行けば
歸り行くなる漁舟
櫓聲はるかに消へゆさぬ。

(11)

樂のし想ひもいざさらば
又の逢ふ日を樂のしまん
別れを惜しむは君のみか
我れも名残の惜しけれど
こゝが浮世ぞおん君よ
しのばせ給へや、暫時し

(12)

浮世晴れての夫婦ぞと
仰ぐ其の日も遠からじ
いざいざいざと手をとれば
名残は惜しき足運び
あたり淋しく世は暗らく
何呷くか 濱千鳥。

(辛)

(1)

(世)

嗚呼夜は更けぬ露をちぬ

見ませ 草葉の 置く露を

辛き運命に泣く者は

君一人には わらざるよ

君を想ひて 朝あ夕

幸こそ 祈る 吾も あり。

(2)

静かに思ひめさせてよ

覆へる 雲の あつくとも

月の光りの 變らねば

いつかは 雲の 打晴れて

つゆ曇りなき秋の月

眺め 得らるゝ 時も あり。

(3)

すすぶる風の 荒くとも

水の 心の 變らすば

やがて 荒ぶる 風止みて

波も 静かに 元の 如

鏡と 澄める 海面を

たゝへん 時も あり べきぞ。

(4)

辛らしと見たる父上も
うつかは心和らきて
秋のみ空の月の如
鏡と澄める波の如
望み得らるゝ露の君
しのばせ給へ吾が爲に。

(5)

君は涙ををしぬぐひ
吾が手をしかどにぎりつゝ
今は何をか隠すべし
君が熱情を得けながら
辛き運命に泣く身をば
聞いて給はれ我夫よ。

(6)

妾生れて三と歳の
まだあどけなきその時に
戀しき父は逝き給ひ
慈愛溢るゝ母の手に
春秋めぐる十有八
過ぎこし方の樂しきは。

(7)

憂き世のことも他にして
春は花見に秋は月
母上ねだりまいらせて
意のまゝになりしが
如何なる天の運命にや
不過を嘆こつ身となりぬ。

(8)

思へば春も未だ寒むき
ささらき月の頃なりき
母上妾よびよせて
聞かせて給ふ御言葉は
見知らぬ人を指さして
今後は父とよぶのよど。

(9)

斯くて妾は父を得き
再び父を得たれども
嗚呼如何なれば如何なれば
妾に辛らき人にして
温たゝかりし母上の
慈愛も曇る身となりぬ。

廣き世界のその中に
妾を愛し給へるは
君と母より外わらず
わはれ不憐と思召し
永久に見捨て永しへに
愛して給へ妾が夫よ

(10)

聲は草間の秋蟲か

泣き咽びつゝ語るなり

心安かれ我妻よ

君が爲には水の中

火の中いとはぬ我なれば

我を力と頼めかし。

(11)

君と我れどのその愛情は

(12)

變らであらん夫婦よと

抱きて泣きしその夜さの

想ひや如何に温たかさ

誓ひやいかにかたかりき。

(四) (淋しき草庵)

(1)

思ひ淋しや秋の夜半

又しても追想過ぎし戀

二世も三世も變らじと

誓ひしことも夢なりき

魔神が射ける毒の矢に

二人は深く射ぬかれぬ。

(2)

二人は深く射ぬかれて

野は冷風の秋もあか

わくもろかりし戀故に

我身を恨み世を恨み

かくて我世の冷めたかる

運命に泣きし幾夜度。

(3)

かつては君と携へて

紅燈籠す花の下

緑蔭涼しさ松の下

君もろ共に諸共に

吾が世は永久に春なれど

祈りしことも空なりき。

(4)

清よき家庭の團樂に

君が得意の音楽を

聴かんとせしも夢なるか

堅き誓ひの萃けき

希望の榮も見るを得で

しばみてぞゆく運命か。

(5)

愛する君を失ひて

嗚呼長しへに傷れたる

戀を偲ひて泣く吾れの

面影さびしやつれては

さてもはかなき運命に

熱つき涙は涸れにけり

(6)

悲し想ひに堪へかねて

月よき庭を彷徨へば

小萩亂るゝ垣のもと

果敢なき命に泣く蟲の

聲も吾が身にひさくらは

憂愁は深く襟に落つ。

(7)

玉どさらしく白露の

み空の星と清よけさの

競へる様の美しくさ

せめて白露の接吻と

嗚呼運命の狂はしさ

怨みに淋びる胸の庭。

(8)

君と別れて 天地に

「君とぞ想ふ」の一言を

幸なき我世の慰藉とて

過ぎし戀路を辿りては

若き命の葉は萎へて

凋落の影身にゆるゝ。

(9)

げにや運命のつめたさを

胸に刻みて長しへに

君を偲はん小羊の

戀よ希望はうたかたの

消へて淋しや草の庵

明星くたく涙かな。

(10) 拂へば落つる袖の露

石と冷やさに驚きて
露にも似たる人生の
はかなき我身しのばれて
置くや白露草の上
暫時が程は泣き伏しぬ。

(11)

嗚呼哀れにも美しくしき
契きりし人と逢ふ瀬たへ
置く露しげき草の上
甘き戀をば追想出で
昔を泣かんは吾のみか
おゝさもあらじわらぬまじ

(12)

八重の雲路の離てける
浪速の里に今もなほ
今宵の月を仰ぎては
もろき生命の戀に泣き
亡き父慕ひ吾れ想ひ
涙に咽ぶ君わらん
(をばり)

淋しき草庵にて

秋雨に惱む

憶露泣咽生

明治四十二年十月五日印刷
全 年十月十一日發行

著 者 美 山 露 韻

大阪市西區粉北通三丁目九十七番屋敷
印刷所 岩 井 吉 雄

大阪市北區空心町一丁目三十八番地

發行所 美 山 武 藏

恋追此恋

露 韻

259
700

087947-000-3

特53-860

恋の追想

美山 露韻/著

M42

DBG-0037

